

書 評

陣内一保・安藤徳彦・伊藤利之 編集

こどものリハビリテーション医学

米本 恭三（東京都立保健科学大学・学長）

本書の前身は、編集が大川嗣雄、陣内一保の両氏による「こどものリハビリテーション」（1991）である。序言の中に、発行されてから8年を経過したので今回はタイトルも一新して「こどものリハビリテーション医学」として出版したとある。しかし、二冊の本を読み比べてみると、改訂2版と思っていた当初の考えは次第に改められた。新しい一冊の書籍が誕生したと言っても過言でない。総括すると、久しく待望されていた小児全般にわたるリハビリテーション医学の教科書が出版されたと言ってもよい。

この度編集にあたった陣内一保氏、安藤徳彦氏、伊藤利之氏は、小児のリハビリテーション領域に精通し、長い診療経験をお持ちの方々である。また、前身の書と比べると半数以上が新しい筆者に変更されており、57人に及ぶ全執筆者は何れもこの界を代表した指導的立場の方々である。

主観的な記述を排し、客観性を重視した教科書になるよう企画・編集され、本書が完成したものと考えられる。

本書の特徴をあげれば、12章にわたる内容が教科書としてのスタンダードな知識を盛り込みながら、明日の臨床に役立つ実践的な書としても大いに役立つことである。

各章をみれば判るが、序論、発達診断・評価、治

療総論、脳性麻痺、精神遅滞、自閉症、てんかん、神経筋疾患、二分脊椎、水頭症、骨関節疾患、四肢の先天奇形と切断、その他、補装具、口腔衛生、摂食指導、そして資料と続く項目立てとその内容は包括的で小児のリハビリテーションの全域が網羅されている。てんかんと自閉症の療育が独立して記述されたことは、注目されている領域でもあり、本書になってより充実した部分の一つと言える。

しかし、重度心身障害児（重度脳障害児）の療育に関しては、呼吸管理、栄養管理、ポジショニング等と問題が多く、アプローチの具体的知識が加われば、さらに完成されたものになろう。

また、章と関係なくMEMOとして最近の知識（9編）を加えているが、興味を引きつけるとともに読みやすくしている。

編集と、執筆に携わった諸氏の大変なご努力で誕生した良書であり、小児のリハビリテーションの専門書である。小児の医療やリハビリテーションに携わる医師、看護婦、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士をはじめ、その他の保健医療職の方々にとって、必読の書として広く利用されることを切望する。また卒前・卒後の教育では小児リハビリテーション医学の教科書にされることをお勧めしたい。

（B5 頁418 9,500円＋税 1999 医学書院 刊）